

「今を生きている」 ～かけがえのない命～

校長 森 勝義

まだ20代の若さなのに壮絶な人生を生き抜いている人物がいます。畏敬の念を隠せません。競泳選手の池江璃花子さんという女性、ご存じでしょうか。彼女は、「T細胞白血病リンパ腫」という、血液のがんでした。池江さんはお母様の骨髄移植手術を受け、見事に驚異的な回復力でアスリートとして復活しました。彼女の記した言葉が胸に刺さります。

「私も、白血病という大きな病気をしたから、よくわかります。思っていた未来が、一夜にして別世界のように変わる。それはとてもキツイ経験でした。」

そんな中でも、救いになったのはお医者さん、看護師さんなど、たくさんの医療従事者の方に支えていただいたことです。身近に見ていていかに大変なお仕事をされているのか、実感しました。本当に感謝しかありません。ありがとうございます。—中略— スポーツは、人に勇気や絆をくれるものだと思います。私も闘病中、仲間のアスリートの頑張りのおかげでたくさんの力をもらいました。今だってそうです。練習でみんなに追いつけない。悔しい。そういう思いも含めて、前に進む力になっています。

逆境から這い上がっていく時には、どうしても希望の力が必要だということです。希望が、遠くに輝いているからこそ、どんなにつらくても、前を向いて頑張れる。私の場合、もう一度プールに戻りたい。その一心でつらい治療を乗り越えることができました。人と会うこと、外を歩くこと、プールの中で全身を使って泳ぐこと。そのすべてが、こんなにもいとおしく、こんなにも幸せだったなんて」

私よりも一回り身体の大きい兄から20XX年、一本の電話が携帯にありました。「今、国立市の〇〇病院に入院している。もうだめかもしれない」と。とるのもとりあえず見舞いに行くと通常の病室ではなく、無菌室と呼ばれるガラス張りの個室、話すのは受話器を通しての会話。ラグビーをやっていた時の兄の面影は全くありませんでした。

病名は「T細胞白血病悪性リンパ腫」。池江璃花子さんと同じ病気。助かる道はただ一つ、骨髄移植。骨髄バンクで適合者をさがすも見つからず。妹も適合検査を受けましたが、不適合でした。死を待つしかない状態の兄、私には一切知らせてくれませんでした。

兄は私には最後の最後まで話すのをためらっていたらしく、妹に説得されて私に連絡してきたとのこと。

私は迷わず、すぐ適合検査を受けました。適合する確率は数万分の一。奇跡的に私は兄と、ぴたりと一致しました。1週間に及ぶ検査、そして骨髄移植手術。私の骨髄液1000mlが兄の体内に移植されました。移植後5年間の生存率は49%と主治医に言われました。しかし、幸運にも現在も元気に生きています。兄から会うたびに言われる言葉、「俺は勝から命をわけてもらった。ホントにありがとう」と。私は兄をリスペクトしています。

人が「今を生きている」ことは奇跡なんだと、兄の存在、池江さんの生き様を見てきてつくづく思います。親から授かった命を終生大事に、限りあるこれからの人生を日々大切に生きていきたいものです。

私は、サンクスギビングに旅行に行きました。行き先はアメリカの首都、ワシントン D.C.です。私は都会が好きなので、とてもうれしかったです。私と私の家族はワシントン D.C.まで車で行きました。私のお父さんとお母さんが「飛行機だとお金がかかるから、車で行こう!」と話しているのをきいて私はびっくりしました。私が今すんでいるインディアナからワシントン D.C.まで車で行くのはとても遠いと思ったからです。私のお父さんに「インディアナからワシントン D.C.までって車で何時間かかるの?」と聞いてみたら、「んー、約九時間くらいかな。」と、お父さんが言ったので、私はとてつもなくびっくりしました。車で九時間いどうするなど、これまでにけいけんしたことがなかったからです。

ワシントン D.C.での私の心に残った思い出は三つあります。一つ目はエイブラハム・リンカーンの記念どうを見に行った事です。リンカーンの記念どうはとても大きかったです。たてものの中に入ったら、リンカーンがすわっていました。私はリンカーンの記念どうにすわってみたいなど、思いました。私のどうがリンカーンのとなりにならんだら、まるでヒーローになれたようで夢のようだと、そうぞうしました。二つ目は、ワシントンモニュメントというとても高いきねんひを見に行った事です。ワシントンモニュメントの真下から見上げると、一番上は高すぎて見えませんでした。「ワシントンモニュメントは、昔の人が一つ、一つブロックを積みあげて、この高さにできたんだなー。」と思いました。ちょうど、ワシントンモニュメントに来た日は晴れていたののでワシントンモニュメントがはっきり、きれいに見えました。最後に、今の大統領、バイデン大統領がいるホワイトハウスを見に行った事です。「ホワイトハウスをもっと近くで見たい!」と、思いましたが、きよかをもらわなくてはいけなかったのので、近くまで行くことはできず残念でした。でも、庭はとても広かったです。庭で人をよんで大きいパーティーができそうでした。

ワシントン D.C.への旅行はとても楽しかったです。またワシントン D.C.に行ける機会がまたあったらいいなと思いました。



ヒゲ森の言葉の森・探検



いへんさんぜつ

韋編三絶

書物を繰り返し読むこと。学問に熱心なこと。「韋編」は、竹や木の札をなめし皮で綴じた書籍。孔子は綴じ紐が何度も切れるほど「易経」を精読したという故事。

**自分が立っている所を深く掘れ
そこからきつと泉が湧き出る。**

フリードリヒ・ニーチェ

1844年～1900年 ドイツの哲学者

自分がやりがいを感じることを追求して、徹底的に深掘りしよう。その領域で「一番」の存在になることができる。